

沿線のまちがもっと楽しく、より身近になるフリーペーパー

THE KAIGAN LINE

神戸市営地下鉄海岸線



気になる活動、ユニークな動きが続々。

地下鉄海岸線に乗ってまちに出よう!

Focus

兵庫運河・真珠貝プロジェクト
兵庫漁業協同組合水産研究会
下町芸術祭
多文化共生ガーデン

Interview

ヴィッセル神戸 小林友希選手

神戸の風景を描き続けて30年
画家・吉岡充さん

みんなの下町日記

兵庫運河で 親子が育てる真珠貝。 約15年続くプロジェクト。

運河で真珠。驚きの組み合わせだが、2007年から活動を継続する「兵庫運河・真珠貝プロジェクト」は、珠入れ、貝の育成、浜揚げ、貝を開いて真珠を取り出すまでの作業を、毎年、公募で集まった親子が行っている。「21年はコロナ禍でほとんど告知もできなかったのですが、募集の2倍近い応募がありました。年々、認知度は高まっています」。そう話すのは、立ち上げ時から関わる道林幸次さん。そもそも兵庫運河は明治期に整備され、全長は約6.5kmにもおよぶ。汚染が問題になった時代もあったが、早くも1971年には「兵庫運河を美しくする会」が発足。少しずつ水質改善してきた、そのシンボルが真珠貝なのだ。貝を海中に沈めて6か月は育成期間。毎週の貝掃除がプロジェクト参加者の仕事となる。「泥や、フジツボにイソギンチャクなどが貝殻に付着してかなり大変。くさくて、きつい作業です」。それでも子どもによっては、そうした海の生き物に夢中になったり、海に浮かぶゴミや干潮の動きに関心を向けたり、もちろん、とれた真珠でのアクセサリーづくりを楽しみにしている子も。「真珠貝の命は真剣に見つめてもらわないといけません。そこからの広がりも自由でいいと思います。真珠をきっかけに運河に着目してもらうのが一番の目的ですから」。

真珠貝プロジェクト会長の道林さんは和田岬在住。もともとは、レガッタ（ボート）競技のために兵庫運河に通っていたそう。



兵庫運河・真珠貝プロジェクト

日本有数の真珠関連企業が集まる“真珠の街”神戸のシンボルおよび環境保全活動の一環として、2007年発足。神戸の大月真珠が技術協力でサポートしている。2022年度の参加者募集は5月末頃の予定。
<https://sea.ap.teacup.com/hyougounga/>



Focus 02

アマモを。アサリを。 自然を再生するために。 漁師たちの本気の挑戦。

兵庫運河では、9年前から、兵庫漁協の若手漁師たちが「水産研究会」を立ち上げて、天然アサリの育成、アマモによる藻場づくりと運河を自然の里海に育てるべく力を尽くしている。「何もわからない状態からスタートして、気づけば環境を守る活動になってたというのが正直なところ。僕らにとっても海をより深く知る機会になってるし、リアルに子ども達の未来につながる話やと今では痛感してます」と漁師の佐々木徹さん。近隣の小学校も巻きこんで、観察会やアサリ育成の体験学習などいまではすっかり恒例行事に。

「小学校の水槽でアマモの苗を育ててもらって、根付いたものを運河に移して、やり続けることで、実際、藻場ができています。藻場ができれば、海の生物も増える。これを子ども達には実感してほしい」と言うのは漁師の井上隆司さん。兵庫区に漁協があること、漁師たちが漁をしていること、それさえも以前はあまり知られていなかったかもしれない。「漁師が時代に取り残されていたのかも。けど、もう漁師だけでは海を昔に戻すことはできないんです。自分らがやるべきことに気づいた以上は、僕らが動いて背中を見せていかんと!」。ふたりの言葉には、海のプロとしての矜持と思いの丈が詰まっていた。



井上さん(左)、佐々木さんが立つのは2020年11月、兵庫運河旧貯木場跡に完成した人工干潟。撮影中、向かいの小学校になじみの子どもたちの姿が見え、気さくに手を振った。

兵庫漁業協同組合 水産研究会

若手漁師が中心になって立ち上げ、2013年には「兵庫運河の自然を再生するプロジェクト」を開始。環境保全活動、養殖実験、子どもたちへの特別授業などを行っている。

<http://www.hyogo-gyokyo.or.jp>



Focus 03

舞台は長田区。 下町芸術祭、 4回目の開催を終えて。

芸術祭、アートフェスティバルは全国各地で開かれているけど、ここ長田での「下町芸術祭」はちょっと毛色が違う。ひとりのディレクターではなく、普段から地元で活躍する面々が寄り集まって、企画と運営をしているのだ。「ピラミッド型ではなく、フラットで水平なやり方。第1回はディレクターが10人ほどいて、僕も把握しきれないくらいでした」と笑うのは、立ち上げから関わる小國陽佑さん。普段は、新長田のNPO芸法にて若手アーティストの活動支援を行っている。「街でそれぞれに活躍する人のネットワークと知恵を交換しながらやっているのが、この芸術祭の面白いところ。

21年は日頃、スタジオ長田教坊を運営するパクウォンさんと趙恵美さんも企画から関わって、各会場を横断する形でライブなどもやってくれたのがすごくよかったですね」。そう話すのは、新長田のDANCEBOXを拠点に活動する横堀ふみさん。とにかく、話を聞けば聞くほどに、地元のキーパーソンの名前が次々と挙がる。「一緒に企画してくれる人をもっと増やしたい。芸術祭を共有できる仲間をいつも探してます」と、まだまだ門戸は開いていくつもり。興味がある人はぜひ名乗りをあげて。



↓駅前鉄人広場で行われた2021年の開幕式。写真は、会場を盛り上げた阪神虎舞の演舞。岩手の民俗芸能を継承して、新長田を拠点に活動中。

下町芸術祭

阪神・淡路大震災20年目の2015年より、2年に1度開催。アーティストの視点や作品を通して地域の魅力を引き出す試み。場所や建物の掘り起こしにも力を注ぎ、先日、複合施設に生まれ変わることが決定した「旧駒ヶ林公会堂」も、2017年の下町芸術祭で会場に使われたこともあり保存、再活用の流れが生まれたという。次回は2023年開催予定。<https://shitamachi-art.com/>



Focus 04

路地の空き地を畑に。 進化を続ける 多文化共生ガーデン。

長田区では「ながた緑プロジェクト」として地域の緑化が進められているが、こちらは空き地で畑を耕しているという話。こまかな路地が密集する駒ヶ林3丁目の空き地に、ベトナム人農場長を中心に畑づくりを進め、パクチー、ヘチマ、レモングラスといった野菜が育つ。実現に向けて奔走したのは、多言語発信のコミュニティラジオ局「エフエムわいわい」代表として活動する金千秋さん。「やらせてもらえる空き地を探すのに2年かかりました。始めてみるとベトナムの人たちの工夫がすごくて、驚かされてばかり。拾った竿や網も活用しながら畑の上に畑の屋根をつくって、空間も余すことなく活用しています」。

2020年から畑を始めて、毎年12月にはたくさんできる大根を地域の人に配り歩く「大根サンタ」イベントも実施。ご近所さんとの挨拶も欠かさずに、近所の住民たちからも「あの畑、よう立派にやってはるわ～」と評判上々だ。畑のさらなる充実はもちろんのこと、この場を介してさまざまな多文化コミュニティを結び、また、急激に増えてきたベトナムレストランと街のつなぎ役としてもガーデンが活かせないだろうか。多文化共生ガーデンのさらなる可能性に金さんは目を向けている。



多文化共生ガーデン

新長田多文化共生ガーデン友の会が主催。メンバーは、空き地探しに尽力したまちづくりコンサルタントの角野史和さんら。長田区地域づくり活動助成を活用して、水道費や資材などの活動費をまかなっている。

⇒2代目農場長のトゥアンさん(写真左)を中心に、現在、10人ほどのベトナム人が畑に関わっている。

Interview

ヴィッセル神戸 小林友希選手

小さな頃から応援してきたヴィッセルで
今年こそはタイトルを獲りたい。

小林友希

2000年神戸生まれ。身長185cm、左利き。レンタル移籍からヴィッセルに復帰した昨年度は22試合(+カップ戦8試合)に出場。今年のヴィッセルは菊池流帆選手や槇野智章選手ら、熱きセンターバック陣にも注目だ。

幼稚園の年長からヴィッセルのサッカー
スクールに通いはじめて、小学3年でヴィッセル
神戸ジュニアに、早くも高校時代にはヴィッセ
ルのトップチームに登録、試合出場も果たした
小林友希選手。まさに神戸と、ヴィッセルととも
に育ってきた。

「2019年から2年間、レンタル移籍で町田と
横浜に行って、久々に神戸に戻ってきたですが、
海だけじゃなくて山も近い、このコンパクトさが
やっぱり住みやすいなと実感しました。僕は、
海も山もどちらも好きなので。コロナの間は人の
多い場所にも行けなくて、森林公園を散歩し
たり、滝を見に行ったりしています」。

そんな小林選手の好物はパン。神戸っ子らしい
ともいえそうだけど、好きになった最大の理由は、
学生時代、体作りのために白米を山ほど食べさせ
られたからでもあるのだそう。

「パンが僕のなかでご褒美みたいになって(笑)。
一番好きなのはシンプルなフランスパン。パン屋
さんによってちょっとずつ違うのも面白いです
よね。今は実家暮らしなのですが、夕飯の後に
家族でドラマを見ながらパンを食べる時間が
あります」。

微笑ましい光景が目浮かぶようだが、いざ
ピッチに立てば圧倒的な守備力で相手チームを
封じる、チームの要。若きセンターバックとして、
大きな期待がかかる。

「ピンチの場面で体を張ってゴールを守るのは
もちろん、ビルドアップやカバーリングといった、
一見目立たない場面でも総合的にレベルの高い
選手になりたい。今のヴィッセルは、海外で活躍
した選手や日本代表選手も多くて、意識とレベ
ルがものすごく高い。今年はJリーグでのタイト
ルも、ACL(アジアチャンピオンズリーグ)も何が
何でも獲りたいですね。それだけのチャンス
のあるチームだと思っています」。

ヴィッセル神戸のホームとなるノエビアスタジアム神戸は、地下鉄海岸線御崎公園駅から徒歩5分。
今年もスタジアムではJリーグ公式戦17試合の他、ACLの試合を予定。





「三ツ星ベルト広告塔」(神戸市長田区浜添通4丁目・2020年2月)

普通の風景も絵に描くことで残していきたい。

神戸の風景を描き続けて30年

画家・吉岡充さん

街角で絵を描いてるこの後ろ姿、見かけた方も多いかもしれない。徹底してリアルに、細密に、その場で見た景色をその場で描く画家の吉岡充さんだ。一度描く場所を決めたら、1週間から10日ほど通いつめて絵を仕上げる、驚くほどの現場主義で風景を描いてきた。「1年に20枚を目指して」こつこつと描き続け、2019年はその14年分の結晶、236点の作品をまとめた2冊目の画集も出版された。

「実際にその場所で描くことで、いろんな出会いもありました。長年、描いているうちに今の風景を残しておかなければという使命感が湧いて、見えるものをそのままに、まったくデフォルメもせずに描いています。その方が記録にもなるでしょうから」。

Profile

吉岡充：1952年生まれ。神戸市長田区在住。京都市立芸術大学の日本画科修了。中学の美術教師として勤めた後、1991年より画業に専念。細密な描写は日本画を描いていた頃の下絵がベースになっている。水彩画の他、仏像彫刻、蒔絵なども手がける。

Information

川西市郷土館で水彩画展を開催中(2022年5月8日まで)。2022年4月21～25日、兵庫県民アートギャラリーで高校時代の美術部同窓生によるコーカリ6人展。2023年1月19～24日、中央区のアートホール神戸で個展予定。

Sketch Style

ホームセンターでカットした板を手製の画板にして、筆洗バケツ代わりのペットボトルを足元に。スケッチのフォームも決まっている。

Location

絵は三ツ星ベルトの広告塔が撤去される前に描いたもの。今回の撮影のために同じ場所を再訪すると、広告塔下の建物も解体が始まる直前だった。

みんなの下町日記

by ウェブマガジン「シタマチコウベ」

海岸線沿線に暮らすさまざまな人達が、何気ない日常を記した3日間の日記。
ウェブマガジン「シタマチコウベ」の人気コンテンツのひとつです。
その中から9人の日記を抜粋してご紹介します。

七月三日(土)



建築士
柳谷菜穂さん

十月二十六日(火)



絵描きびと
みゆきちさん

十一月二十六日(金)



北の椅子と
服部真貴さん

八月十日(火)



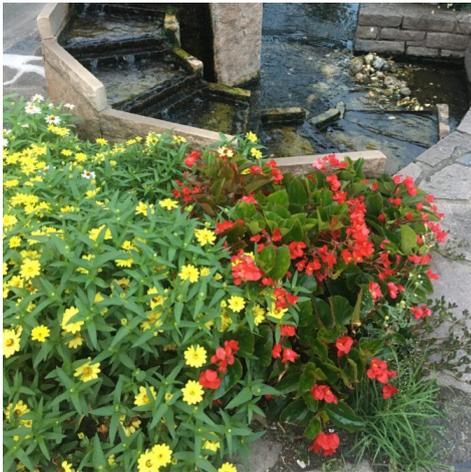
LOST BIRD
坂本ひろきさん

九月二十日(月)



アーティスト、ダンサー
松縄春香さん

八月四日(水)



自転車屋PORT
川崎貴之さん

一月十三日(木)



切り絵作家
トダユカさん

十一月九日(火)



駒ヶ林浦漁業会 漁師
尻池宏典さん

十月三十一日(日)



アーティスト
田岡和也さん



シタマチコウベは神戸の新しい魅力に出会うウェブマガジンとして、数々の独自コンテンツを積み重ねています。掲載した日記の全文はもちろん、その他の記事もすべて無料でご覧いただけます。

七月三日（土）

今日は依頼されている8パネルキャップの型紙おこし、の調整作業に入る。昨日も同じ作業をしていたのだけれど、なかなかシルエットが決まらない。……そうこうしているうちに次の予定「苺藻の名店 白馬焼肉店でハラミ」が迫る。正直いうと型紙をおこしながら頭の片隅ではハラミのことばかり考えていた。朝食はプロテイン200cc、お昼はフレンチトーストと胃袋にもかなりの余裕をもたせていた。3日前から白馬のハラミをSNSで予習する所業も。ぬかりはない。完璧のコンディションで挑んだ白馬焼肉店の和牛ハラミ。ほんとーうーうーにおいしかった！…とにかく、死ぬまでに何回も食べに来られるよう、頑張ってたっくん働こうと思った。そんな1日でした。

柳谷菜穂 | 1993年生まれ。一級建築士事務所こと・デザインにて地域計画やまちづくりを学ぶ。「手のひらにおさまる仕事したい」と思ったことをきっかけに特技の裁縫を生かした「柳谷縫務店」を開業。

八月十日（火）

週末は和田岬で鳥を探すために服を売ったりしますが、それだけじゃ鳥は見つからないし飽き性なもんで、他の週2、3日は建設現場にいます。神戸で廃屋を自らリノベーションして再活用している西村さんという方が主催している建築集団・西村組に所属して現場作業員をしています。あとはたまに鶏のお世話。烏骨鶏が7羽。今日は左官day。キッチン周りとトイレ前の壁を塗っていきます。僕はなぜか左官とか庭仕事とか自然っぽい土っぽい仕事をお任せ頂けることが多いです。ちなみに現場仕事はほとんどやったこと無いので、西村組の活動に参加しはじめてから徐々に覚えていってます。DIYもしたことなかったのに、家つくってるなんて笑えます。

坂本ひろき | 2021年1月に和田岬に鳥を探す服屋LOST BIRDをオープン。建築集団・西村組所属。スタイリストや藍染作家としても活動中。

一月十三日（木）

今日も思いっきり冬。雪もチラホラ。近くの小学校にある2つの市民図書室と、兵庫図書館と、六甲にある「ちいさなとしょかん」さんなど、我が家は図書館愛用家族である。今日は長男と和田岬小学校の市民図書室へ。雪降る中、震えながら自転車に向かうも学校の門の前でガ〜ン！ 借りていた本10冊を入れていた鞆、玄関に置いてきた〜。私、こんな事ってよくあるのだ。どんくさいぞとしょげず、そそっかしいお茶目さ〜ん！ と、しょうがない自分を励ましながら、息子を図書室へ残り震えながら取りに帰る。各々に本を選び、帰り道は恒例の淡路屋さんでミニクレープ。100円で焼き立てクレープが食べれるなんて。美味しいけど、寒くて震えながら食べる。

トダユカ | 結婚を機に神戸市兵庫区の和田岬に住む。切り絵を中心としたものづくりをしている。夫は御崎公園のすぐ近くで豆蔵珈琲を営む。その2階のアトリエで制作。3人の子供の母でもある。

十月二十六日（火）

夜になってはっぴーの家で不思議な送り出しをした。各テーブルバラバラに好きなボードゲームで遊び、またあるところでは太鼓と踊りが始まる。いろんな料理を食べながら、お酒も飲む。家族さんも、住んでる方も、会いに来てくれた皆も、あちらこちらでごっちゃになる。それぞれがそれぞれで思い思いに過ごす。娘さんからお通夜らしいお通夜というものは故人が望んでいないから、と。なるほど、これはきつと、まだ側にいてくれる彼女と最高の時間を過ごすための時間。…笑いあったり、寂しくなったり、様々な気持ちが一気に押し寄せてくる。ここはやっぱりカオス。こんなことばかりしていたら、不思議と歳を重ねるのも、最期も寂しいものじゃないと思えてくる。

みゆきち(首藤美幸) | 1984年神戸生まれ。歌って踊れるイラストレーター。コミュニケーションの中から相手の本心にデザインしたいものを引き出し、描く。介護士としてはっぴーの家に勤務。

九月二十日（月）

9月6日から描き始めた「大正筋ジャッターアート」の製作3日目。私の担当する店舗は、千鶴屋精肉店さん。…神戸長田に来て4年。始めは他所者だったのが、いつの間にか住人になり、知った顔が増え、居場所ができた。こどもが産まれたことで、より一層、風景に溶け込んできたような体感があるタイミングでもあり。身体が馴染んだ場所で表現活動ができるのは、面白い機会だ。しかし、長田の人は本当に放っておかない。色んな人が話しかけてくる。10分に1度のペースで。製作の手は止めたくないけれど、どうしても話しかけずにはいられない衝動で声を掛けてくれた人たちとの会話が面白くて、あれ、親戚の人だったかな?みたいな気持ちになる。

松縄春香 | アーティスト、ダンサー。埼玉県出身。多摩美術大学卒業後、2017年「国内ダンス留学@神戸」をきっかけに神戸に移り住む。現在は1児の子育てをしながら、身体でつくることを軸に活動中。

十一月九日（火）

午前5時30分、神戸空港沖合、西風が強く吹き始め波が高くなる。大阪や淡路岩屋などの同業者は休む中、神戸の漁師は荒れ狂う神戸沖でシラス漁をしながら波と格闘している。大阪湾は内海なので波なんて大丈夫なのでは? と思う人も多くいるだろうが、実は外洋よりも危険な時がある。船の性能や装備が充実し転覆事故などはほぼ無くなったが、船からの転落事故などは起こり得る。気が引き締まる。自然と歯を食いしばる。そんな状況で、一定の成果を出し帰港できると達成感は強い。夕飯の晩酌はいつもより身に染みだ。こんな日は、身体的疲れよりも精神的疲れが大きい。さらに加齢なかりピングでうたた寝ソファで寝てしまう。ああ布団が恋しい。

尻池宏典 | 長田区駒ヶ林にて100年以上続く漁師の家系に生まれ、高校卒業後漁師になり24年。主に船曳網漁(しらす漁、いかなご漁)を営む。近頃は、仲間と共にKOBÉ PAIR TRAWLINGSとして活動中。

十一月二十六日（金）

常に風呂の前とベッドの横には積んである、雑誌やムック、写真集、広報誌も。そんな中でも、繰り返し読むのは児童書。図書館でも、とりあえず児童書コーナーからスタートする。ファンタジーの中に、奥深いことの様々が潜んでいて、何度も同じ物語を読む。そして、初めて読んだ日と同じように吸い込まれ、幼かった自分と重ねあわせる。息子が小さかった頃は、寝る前の読書の時間風風呂の読書の時間もとりにくく、10年の間、息子と寝る前に読み聞かせる絵本の時間がとても大切だった。そんなことで、「北の椅子と」にもカフェの中に、いろんなところに本を置く。ちよこっと現実逃避ができるの良いな、と。

服部真貴 | 1975年須磨生まれ育ち。兵庫区在住。小さな頃から通っていた父の材木屋の上に住んで、住まいの裏で「北の椅子と」を運営。インテリアや食べること、北欧の暮らしなどに興味あり。

八月四日（水）

家には9ヶ月の娘がいる。一挙一動観ているだけで可愛い、親ばかであると自覚したほうが良いのだが、笑顔をおみまいされると、ほんとと天使かと思う。そんな彼女も、僕たちを悩ますことがある。その一つが、午前6時前後には起きてゴソゴソし始めることだ。手足を床にドンドコ、「私は起きているから」と言わんばかりの音を立てるのだ、早起きが過ぎる。今日も、彼女なりの主張が始まった。午前5時半、ドンドコで目が覚める。いつもより早起きすぎよ娘さん！ 抱っこひもで散歩に出かけ、もう一度寝てもらおうと思いたち、外にでた。こんなに朝早くに散歩することは初めてで、夏の早朝は最高に気持ち良かった。…結果、娘さんありがとっってなった1日の始まり。それでは、行ってまいります。

川崎貴之 | 須磨区出身。自転車屋を営む実家で生まれ育つ。中央区相生町のビル1階をリノベーションして「自転車屋PORT」を2020年6月オープン。バーカウンターではコーヒーやお酒の提供も。

十月三十一日（日）

コロナ禍の外出自粛と「とりあえず野菜育てたらええやん」と、妻の一言が後押ししてくれて、今年3月から始めた小さな畑。自宅から10km離れた場所にあるので、早朝、新長田の商店街をチャリで駆け抜ける。中学生の息子の食農教育に。とかも思ってたけど、全くもって興味しめさないので無理に連れて行く事はせず。収穫した野菜は食卓に並び「穫れたん?うまいやん」と、結構食べてくれている。もうそれで十分。週末に1人、畑であれやこれや考えて。また、時にぼーっとするのがとても贅沢で。小さな畑での出来事も、食料自給率向上の一端そのまた一端を担っていると思えばなんだか胸張れるし、これからも畑するの頑張れそう。なんせ楽しい。そして野菜は美味しい。

田岡和也 | 和田岬在住。折紙とマーカーで絵を描く。主な展覧会として「マイホームユアホーム」芦屋市立美術館、「兵庫景」兵庫図書館、「六甲ミーツ・アート2020」、「下町芸術祭」など。



新長田の鉄人広場で行われた「下町芸術祭2021」開幕式の一場面。「下町芸術祭」については中の記事をぜひ一読ください。